

理学系研究科長・理学部長就任にあたって



やまもと まさゆき
山本 正幸

1947年生まれ。東京大学理学部生物化学科卒業。理学博士。専門は分子遺伝学・分子細胞生物学。

2007年度より2年間、理学系研究科長・理学部長を務めることとなりました。130年の歴史をもち、有為の人材を数多く抱える理学系研究科・理学部の舵取りを過ちなく行うのは、身に余る大役ですが、皆様とともに本研究科の使命達成に向かって進んでまいりたいと思います。どうかご協力をお願いいたします。

理学系研究科・理学部における研究の本質は、自然を根源からとらえ、先人が誰も気づかなかった現象や法則を明らかにすることにあります。そしてそのような研究を支えているのは、各人の研ぎすまされた目と、不思議と思えることに解答を与えようとする持続的な熱意だと思えます。いくら枠組みがあっても、研究者個人の自発的な問題設定と研究意欲がなくては、真に新しいことは見えてきません。理学系研究科・理学部は、何かに応用できるか否かは問わず、自然に根源から取り組む研究を守り育ててきました。また今後もこの基本姿勢に揺らぎがあってはなりません。教育では、自然についての根源的な問いを解こうとし続ける後継者を育成するとともに、このような活動が人類の文化や生活を豊かにするのにどれほど大きな寄与をしているかということに社会にきちんと橋渡しできる人材の育成にも努めていきたいと思えます。

研究科長・学部長 山本 正幸（生物化学専攻 教授）

理学系研究科・理学部は、過去に輩出した人材の層の厚さからも、科学研究費補助金や21世紀COEプログラムなどの採択状況からもわが国有数の研究機関であることは間違いなく、また発信する研究成果は国際的に高く評価されています。その地位は盤石のようにも見えます。しかしながら理学を取り囲む今日の状況は、決してそのような安穩たる見方を許してはくれません。私が理学の将来を懸念するのはいくつかの理由があります。ひとつには、社会が豊かになり、高度の科学技術が当たり前のように生活の隅々に浸透していることが、かえって生活が科学に支えられている感覚を希薄にし、子供たちに理科離れを促進しているのではと感じられることです。科学技術を享受している大人たちにも、子供たちへの科学教育に熱意がさめているのではないかと思われるふしが多々あります。

ふたつには、研究者のキャリアパスが、若者の将来の選択肢として魅力的でなくなっているのではないかということです。わが国では、大学院博士課程の院生も教育を受け授業料を支払う身分です。20代後半になって、生活費を工面した上に授業料も納める生活は、喜んで受け入れたいものではないでしょう。幸い理学系研究科ではこの5年間、21世紀COEプログラムのリサーチアシスタント制度を活用して、博士課程の院生にある程度の経済援助を行うことができましたが、なによりも、博士課程の学生は研究を担う一員であり、最低限の生活保障があるのは当然というように世の中の意識を変え、経済的な支援制度をつくっていかねばなりません。また、ポストドク制度が拡充された反面、博士号取得者の多くがポストドクとして一時的なポジションに滞留している現状があり、そこからより恒常的な職、独立研究者としての職に就くのがたいへん難しくなっていると

いう現実も、士気を低下させているといえます。この問題には政策レベルと大学で対処できることの両面から打開策を考えていかなければならないと思います。

さらにもうひとつの懸念があります。それは、大学の研究活動に対する評価や研究資金の配分の基準が、短期間で得られる研究成果が、どの程度人間生活に役に立ち経済効果をもたらすか、という方向にどんどんシフトしているように見えます。このような傾向が続けば、50年先100年先に人類に大きな福祉をもたらすような基礎研究は芽のあいだに摘まれてしまいます。科学の歴史は、まったく思いがけない研究の展開から重要な発見が生まれてきた例をいくつも示しています。前もって成果まで見取り図が描けるような研究は、えてして底が知れているものです。このような科学研究の本質について社会の理解が得られるよう、私たちはきちんと説明責任を果たしていかなければなりません。

対処すべき懸案ばかり書き連ねましたが、自然に対する好奇心、探究心をおもちの方はぜひ理学部・大学院理学系研究科においでください。そこには不思議の最先端があります。宇宙の果てが、素粒子が、極超低温が、一分子の動きが、10兆分の1秒の化学反応が、地球の内部が、海洋が、オゾンホールが、古生物が、遺伝子が、タンパク質が、細胞の振る舞いが、生命の進化が、知覚や記憶が、人間を取り巻く環境が、そしてまだまだたくさんのわくわくするものが、きっと見えてくることでしょう。東京大学大学院理学系研究科・理学部はその憲章に謳われた「知の創造と継承」の責務を果たしつつ、得られた成果や研究の醍醐味をわかりやすく情報発信し、社会との連携を心がけて進んでまいります。ぜひ皆様のご理解とご支援がいただけますよう、心からお願い申し上げます。